

**(現状の説明)**

教育学部は、本大学 6 番目の学部として、平成 19 年 4 月に発足した。

本学部は乳幼児保育、幼稚園から高等学校に至る学校教育、家庭における子どもの養育・しつけ、青少年のカウンセリング、国際化と教育、生涯にわたる人間形成などの保育や教育の諸問題の教育研究を推進し、社会の変化と要請に的確に対応し、学校、保育現場の諸問題に真摯に取り組み、カウンセリングマインドや異文化理解力をもち、教育愛、使命感を持った教員、保育士となりうる人材の養成を目指している。

学部の構成は、1 学科(子ども発達学科) 2 専修(保育・初等教育専修と初等中等教育専修)からなる。2 専修を設けたのは、保育士資格に関しての厚生労働省からの要請に対応するためである。保育・初等教育専修では、保育士、幼稚園教諭一種、小学校教諭一種の資格ないし免許状が取得でき、初等中等教育専修では、幼稚園教諭一種、小学校教諭一種、中学校教諭(数学)・(音楽)一種、高等学校教諭(数学)・(音楽)一種の免許状が取得できる。

以上の目的を達成するため、本学部は以下のことに努めている。

- (1) 子どもの発達を長期的視野に立って考えることのできる教員を養成するため、例えば、保育士と幼稚園教員、小学校教員と中学校教員といったように複数の免許ないし資格取得を奨励する。
- (2) 総合学園である利点を活かして、すべての学生が 1 年次から附属幼稚園・小学校、併設中学校・高等学校での実習に参加できる「ふれあい実習Ⅰ(観察)」をはじめ、多くの学外実習プログラムを準備して、実践力のある教員の養成を目指す。
- (3) ネイティブの教員による英語教育、海外教育研修によって実践的な英語能力を育成し、小学校高学年の外国語活動必修化(新学習指導要領)にも対応しうる教員の養成を目指す。
- (4) 学年ごとに少人数によるフェイス・トゥ・フェイス教育を実施し、学生一人ひとりの自己実現を支援する。

**(総括評価)**

上記の目的がどの程度達成されたかについては、教員の教育研究活動を大学がまとめて報告する『大学年報』、全学 F D 委員会が取りまとめた学生による授業アンケート調査、教員によるリフレクションペーパー、『椋山女学園大学研究論集』、『教育学部紀要』などで公表した(一部は今後公表予定)。概して、学部 1 年目は順調なスタートを切ったとすることができる。その特筆すべき点を所見の項で記す。

**(所見)**

- ① 19 年度入学者は 167 名(志願者総数 917 名、定員 147 名)であり、質の高い学生を確保できた。
- ② 附属・併設校との連携による「ふれあい実習Ⅰ(観察)」及び「ふれあい実習Ⅱ(参加)」は、実践的学習として学生に高い評価を得た。「ふれあい実習Ⅰ」については、260 ページにわたる報告書を作成してその成果を公表している。また、2 年生から始まる保育実習に備えて、附属幼稚園で 100 名余が 2 週間(学生 1 人につき 1 週間)にわたる実習体験に参加できたことは、学生と教員の両者にとって、保育実習の課題がより鮮明になったという理由で有益であった。
- ③ 本学教員による保育士、幼稚園教員を対象とした現職セミナー(保育実践ワークショップ)は、本学部の教育内容の披露の意味もあって行われた。作曲法とわらべ歌指導法の両講座とも高く評価され、学部の指導内容、方法が現職教員、保育士に受け入れられるものであることが実証された。
- ④ 月曜日から金曜日まで毎日 40 分ずつ通年で開講する教養教育科目「英語Ⅰ」は、学生に好評で脱落者も無く、しかもケンブリッジ英語検定試験の成績は、一般標準より優秀で、小学校の外国語活動に対応することができる教員の養成に大きく貢献すると考えられる。
- ⑤ 教員が、授業アンケートに回答し、自身の授業の自己評価とするリフレクションペーパーは、本学部教員の提出率(92.3%)が、他学部の教員(大学平均 54.2%)に比べてきわめて高い。教員養成学部の教員として真摯に授業に取り組む姿勢の表れとして評価されうる。
- ⑥ 保育士、幼稚園・小学校教諭に必要な技能を育成する「基礎ピアノⅠ・Ⅱ」は、専任教員と非常勤講師のコマ増を行い、希望者全員を受け入れた。
- ⑦ 数学教諭希望者に専任教員が補習教育を実施して、学生の実力向上に寄与した。
- ⑧ 専任教員 1 名の追加採用については、教員資格審査等の所定の手続きを踏まえ実施した。